訃　　報

故 菱 田 仁 士 先 生
（1941 - 2022）

菱田仁士先生のご逝去を悼む

本学会功労会員の菱田仁士先生は 2022 年 12 月 31 日にご逝去されました．ここに哀悼の意を表し，謹んでご報告申し上げます．ここで，菱田先生のご経歴の一端を披露し，業績を回顧して故人を偲び，ご冥福をお祈りしたいと存じます．

菱田先生は 1941 年 4 月 27 日にお生まれになりました．名古屋大学医学部を 1965 年に卒業し，1970 年に名古屋大学大学院（環境医学研究所）修了，医学博士になられました．1971 年から 1973 年まで名古屋大学第一内科（心臓病研究室）副手として勤務され，1973 年に新設された名古屋保健衛生大学（現藤田医科大学）内科（主任 水野 康 教授）に講師として赴任されました．1979 年に名古屋保健衛生大学内科助教授となり，1988 年に藤田学園保健衛生大学（現 藤田医科大学）内科教授となられました．2002 年 2 月藤田保健衛生大学病院副院長，2006 年 2 月院長に就任，2009 年 3 月藤田保健衛生大学を退職されました．その後，医療法人誠厚会名駅前診療所の保健医療センター所長を勤められました．

名古屋大学第一内科（心臓病研究室）は心電図学が研究の中心であり，菱田先生は心電図学で博士論文を取られるとともに，心エコーを始められ，環境医学研究所時代に同僚と共に WPW 症候群の早期興奮を心エコーで検出できるのではないかと考えられて研究を始められ，その結果，1976 年の Circulation. に論文が掲載されました[1]．また，心エコーを用いて，陳旧性心筋梗塞を対象として asynergy 診断の意義を検討されました[2]．その後，心電図と心エコー図の相関の総説[3]を執筆し，初心者のための心エコー図の読み方の教科書[4]を執筆しておられます．その後，経食道心エコーが東海地区の久永先生と山口大学が相前後して始められたのを契機に，胃カメラ経験のある教室員が戻ったのを機会に経食道心エコーを始められました．経食道エコー開始に際しては，神戸中央市民病院に検査見学の機会を設定すると共に，経食道心エコーのアプローチでは，左房が 1 番明瞭に観察できることから，左房機能に注目して研究を始められました．

一方，心電図については，Late potential（LP）（心室遅延電位）が，致死性心室性不整脈の発生と関係がありその検出に力が注がれた時期があり，医用電子学教室と協力して，LP と単極誘導記録とマッピングの検討を研究されました．

超音波の組織性状の研究にも情熱を持たれ，超音波が組織性状を本当に反映しうるか否かを確認したいとの希望で「超音波顕微鏡を用いて評価」することを発案し，東京湯島にある日立製作所の研究室を訪問して共同研究を遂行され，超音波顕微鏡で組織性状を鑑別しうることを証明されました[5]．血管内エコーが実用化されると，それを用いて，動脈硬化ウサギを用いた動脈硬化病変の性状評価や，急性・慢性肺塞栓症における血栓塞栓の性状評価を始められました．

超音波が組織の性状評価をしうるという信念のもと，B モードから超音波顕微鏡，血管内エコーに至るまで，ご自身の研究の根幹を曲げることなく，研究者として，エコーマンとしての志を最後まで貫いた印象がとても強いです．ヨーロッパ心臓病学会で

オーストリアを訪れた際には，どうしてもドプラー邸が見たいということで，医局員と共にザルツブルグ マカルト広場にある生家を見学したことは今でも記憶に新しいです．とても嬉しそうにドプラー邸にカメラを向けて写真に収めておられました．

1998 年 4 月に名古屋で第 9 回日本心エコー図学会会長を務めることになり，巾広い人脈を利用して開催に臨まれました．大会の中では，演者と講演の聴衆者が一体となるような聴衆全員参加型形式のアンサースイッチシステムを初めて導入されたことは我々の記憶の中に今でも新鮮に残っています．2002 年 9 月には名古屋で第 50 回日本心臓病学会会長を務められました．日本超音波学会の総会は，機会がなく，残念ながら主催されていませんが，評議員としては 1994 ～ 2006 年まで務められました．

藤田保健衛生大学の教授・病院長就任時代で私共に印象深く残っていることは，多忙な中でも，賛否両論，どんな意見にも耳を貸しておられたことです．ご自分にとって嫌な意見でも，表情を変えることなく耳を貸し，そうして収集した様々な意見を，特殊能力ともいえる記憶力を用いて，ご自身の頭の中で整理整頓され，次の課題を乗り越える際に，その整頓された情報から適切な対応方法を引き出し，次の難題に立ち向かっていかれました．藤田学園保健衛生大学（現 藤田医科大学）循環器内科の 2 代目教授を務めると共に，病院長の大役をこなし，激動の時代を循環器内科医局，藤田医科大学病院共に次への世代に繋ぐことができたというのは，やはり研究者として初志貫徹できる「医師・研究者としての覚悟を持ち，常に道を離れない強い心」を人知れずご自身の中に持っておられた方であると思います．

（藤田医科大学　名誉教授　循環器内科客員教授
岩瀬　正嗣，iwaseski@gmail.com）

文　献

1） Hishida H, Sotobata I, Koike Y, Okumura M, Mizuno Y. Echocardiographic patterns of ventricular contraction in the Wolff-Parkinson-White Syndrome. Circulation. 1976;54:567−70.
2） 菱田仁, 勅使河原敬明, 大橋進, 宮城裕, 野村雅則, 久田澄夫, 水野康, 外畑巌. UCG による虚血性心疾患における asynergy 診断の検討－陳旧性心筋梗塞を対象として－. 心臓. 1977;9:720-5.
3） 菱田仁. 心電図と心エコー図の相関. エレクトロニクスの臨床. 1979;147.
4） 水野康, 菱田仁. 初心者のための心エコー図の読み方. 東京: 新興医学出版社; 1983.
5） Hishida H, Sakabe Y, Kawamura K, Hagiwara K, Murashima Y, Kodama K, Sugiura Y, Koyama Y, Tamagaki H, Fukui M, et al. Evaluation of cardiac tissue from two-dimensional echocardiogram: analysis of gray level and its distribution. Jpn Circ J. 1990;54: 316-21.